ピ-テル・ブリュ-ゲルの《牛群の帰り》　《雪中の狩人》にみられるフランドルの聖務日課書,時禱書,月暦版画の図像的伝統について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5231

明治大学教養論集　通巻394号
(2005・3) pp. 1-66

ピーテル・ブリューゲルの《牛群の帰り》《雪中の狩人》にみられるフランドルの聖務日課書，時禱書，月暦版画の図像的伝統について

森　　洋　子

はじめに

1985年3月発行の本教養論集に，拙稿「ブリューゲルの2素描《春》《夏》にみられるフランドルの時禱書と月暦版画の図像的伝統について」が掲載された[1]。本論稿は基本的にはその続編である。ブリューゲルの季節画シリーズは5点現存しているが（1点は紛失），前論文では，ブリューゲルの素描《春》《夏》と絵画的に関連をもつ《暗い日》《干草作り》《穀物の収穫》の3点について論じた。本稿では残りの2点《牛群の帰り》《雪中の狩人》について近年の筆者の研究成果を述べたい。5点の季節画シリーズの中，《干草作り》以外の作品には1565年の年記があるので，この年代に先行するフランドルの聖務日課書や時禱書およびブリューゲルと同時代に発行された月暦版画などとの図像的な関連に注目したい。

1. 《牛群の帰り》（1565年，図1）

このシリーズの特色は，ブリューゲルが元来，6点セットであったと推定

されるこの季節画シリーズに，特定の月を描写したのではなく，各作品にその季節にもっともふさわしい農民の営みを複合的に描いていた点である。

《牛群の帰り》の中景左の小高い山の上に，一部，廃墟化した中世の重厚な城砦が聳え（図2），また楔形に曲がる川岸に，現在，ベルギーのブイヨン（Bouillon）に立つ城砦を思わせる城が見える。16世紀にはすでにかなりの数の城砦がフランドルの各地に点在していたが，ブリューゲルは季節画シリーズだけでなく，《サウロの自殺》など，ほかの作品にも風景表現の点景的な要素として城砦を多く描いている。ブリューゲルはかなりの城好きだったと思われる。

《牛群の帰り》は晩秋を描いているが，「秋」の月といえば，伝統的には9月，10月，11月を表している。これらの月の古いオランダ語の表記に注目し，それと農民の営みとの関連を述べてみよう[2)]。

「9月」秋の月，果実の収穫の月，オート麦の月，大麦の月，スペルト麦の月，敬虔の月，昼夜同じ月

「10月」祈禱月，聖バーフの月，種蒔きの月，ドングリの月，躊躇の月，ラードの月，ワインの月（気候の変化で現在，葡萄の生育はごく限られた地域となっている），薔薇の月

「11月」万聖節の月，小さな魂の月，狩猟の月，蓄殺の月，血の月，油脂の月，風の月，霧の月，冬の月，枯れ枝の月，娼婦の月

ブリューゲルの作品には，10月の「ドングリの月」（ドングリは豚の好物）や「ワインの月」（葡萄の収穫とワイン作り）が秋の“営み”として表現されているが，画面の中心的なテーマである牛追いは聖務日課書や時禱書の慣習的な月暦表現には含まれていなかった。ブリューゲルは《牛群の帰り》において，従来，ポピュラーな秋の図像である「種まき」を表現せず，牛追いを中心に描き，ごく添景的には葡萄の収穫と鳥罠，さらにほとんど目立たない位置に豚の飼育を導入していた。

構図の特色としては，牛追い，葡萄畑，流れる川の3要素が平行した対角

線として形成されている。家畜も人間も多く，後ろ姿として描かれているが，《雪中の狩人》の前景の人物同様，こうした表現はブリューゲルの民衆表現の特色といえよう。

画面では人間，動物が秋の自然の一部となっているが，ハンス・ゼーデルマイヤはこうした同化作用について，こう述べている。「人間から自然への移行の媒介となっているのは動物である。ゆったりと動く革帽子の牧人たちは，彼らを取り囲む家畜と同類となっている。牛の背は丘の稜線と“同化”し，その尻尾は木の株のようだ。斑点模様の牛は“秋”の斑点性と共鳴している。」[3]

以下にこの作品にみられる農民の営みについて論じてみよう。

(1) 牛追い

晩秋，牧人たちが山に放牧していた牛を村に連れて帰る途中である。木々の葉もすっかり落ち，重苦しい雨雲が空を覆い始める。ある牧人は雨に降られないうちに家に着こうと牧杖で牛の尻を押し，急がせている。かつて A. ハーベルラント（1948 年）は，アルプス地方で牧人たちが聖ガルスの祝日の 10 月 16 日を，家畜を連れた下山する日と決めていた習慣に注目した[4]。550 年頃，アイルランドに生まれたガルスは 613 年頃，スイスのコンスタンツ湖の南にザンクト・ガレン修道院を創設し，645 年に没した。伝説によると，聖人が熊の足の棘を抜いて以来，この獣は聖人の隠遁生活を守ったという。確かにブリューゲルは若い頃，アルプス越えをし，牧人たちの生活を目撃したのであろうが，この作品で，直接，聖ガルスの祝日を意図しているとは思えない。因みにベルギーではこの祝日にバラの木を移植したり，木の割れ目を補強したりするらしい[5]。

ブリューゲルの追従者マルテン・ヴァン・ヴァルケンボルフは《放蕩息子のある風景 11 月》（図 4）にこの情景を導入している。中景の急な坂を牛たちが駆け下りているが，その群れの存在はあまり目立たない。ただ徒歩姿の

牧人と馬に乗ったリーダーの組み合わせはブリューゲルの画面と共通している。

(2) 葡萄の収穫（図3）

ブリューゲルは葡萄の収穫を営む農民たちを中景の川に沿った小高い丘に位置づけている。この部分を拡大して見ると，本来なら葡萄の葉や房が密集しているはずだが，目立つのは葡萄の蔓用の棒である。しかしこの情景は決して葡萄の木の冬季剪定ではなく，前かがみの農民の動作から，やはり葡萄摘みであろう。ブリューゲルは描いていないが，一般的な作業手順としては，農民たちは畑で葡萄を摘み，それを籠に背負って作業場に来る。すると別の農民たちが大きな桶の中で葡萄踏みをし，絞られた果汁を樽詰めにし，馬車で運び出すのである。

ブリューゲルの働く農民たちのすぐ近くの丘に，絞首台が立っているばかりか，処刑された人間がぶら下がっている（図5）。四肢を縛りつける車輪刑もある。これらは全体からすればほんの点景にしか過ぎないが，季節画の他の4点にはない不気味な情景である。晩年のブリューゲルが《絞首台の上のカササギ》（1568年）では，もはやこうした罪人の姿を省き，「絞首台の許で踊る」というオランダ語の諺で暗喩させ，踊る農民たちの姿に変えていた[6]。大自然を謳歌するブリューゲルにとってこうしたリアルな姿はたとえ点景であろうと，避けたかったのであろう。

写本の世界

1510年頃のヘラルト・ホーレンバウトが彩飾した『グリマーニの聖務日課書』《9月》（図7）では，画面全体に葡萄摘みに励む農民の姿が描かれ，まさにブリューゲルの《牛群の帰り》の先例といえよう。個々には背景に大規模な城が聳えているが，明らかに《ベリー公の豪華時禱書》を範例としている。それと比較して，《ヘネシーの時禱書》は前者を手本にしながら，背景は巨大な岩山と農家を描き，宮廷的な雰囲気を削除している。岩山とその

上の城塞など，ブリューゲルの《干草作り》を啓発したと思われる（図6)。同じくベニングの工房でも《10月》に葡萄の収穫を描いているが，通称『ゴルフの書』の《10月》では丘陵地帯にある葡萄畑での収穫，圧搾場での葡萄しぼり，樽詰め，その側で商人たちがワインを試飲している情景が描かれている（図8)。別のベニングの時禱書では町の広場，おそらくブリュッヘ（ブリュージュ）のクラーン（クレーンのオランダ語 kraan）広場を舞台に，クレーンによるワイン樽の牽引，試飲用に樽からワインを杯に入れる農民，そしてそれを味わいながら，取引きをする商人たちがみられる（図9)。とりわけ巨大な木造クレーンの構造は興味深く，車輪の中で kraankinder と呼ばれる屈強な男たちが段を踏みながら，車輪を動かしている。

タピストリーの世界

おそらく南ネーデルラトで織られた《葡萄の収穫とワイン圧搾》（図10）は，貴族に応対しながら，生き生きと働く農民の作業現場を描写している。向かって右端の遊宴の情景（？）が切断されているが，花園風な背景に小動物が群がる様子や人物の表現は，制作地が南ネーデルラントと推定されても，貴族の衣装などはフランス的である。また収穫した葡萄の背負い籠の形状や機能はフランス的な特色を示している。

画面中央の樹木を境に，右半分は農民たちが熟した葡萄を収穫し，貴婦人に試食用にと葡萄の房を小皿に入れて持ってくる。また，左半分での前景でも，領主夫妻がもぎたての葡萄の房を手にとって試食している。彼らのすぐ側の大きな盥の中で葡萄踏みが行われる。つぎに踏み潰した葡萄液は圧搾機でさらに絞られる。このとき，2人の男たちが組んで，圧搾機のスパイラル状の心棒を棒で回すと，その蓋で搾り出された葡萄汁は桶の中に溜められる。それを漏斗でワイン樽に移す。衣服について注目すると，農夫は短い上着とスボン，農婦は長い作業着を着ているが，上流階級の婦人たちは織り込みのある長い衣装を身につけている。画面全体で，20人くらいの男女が登場しているが，それぞれの身分は衣装や物腰によっても明白である。やはり領主

夫妻が被り物を含め，一番，高価な衣装を着けていることが分かる。この所有者の紋章が上部の左端に示されているが，同定されていない。

月暦版画の世界

この営みが描かれている最も初期の版画のひとつはニコラ・ル・ルージュの『牧人暦』の《10月》（図11，1496年）であろう。乙女座と天秤座の両方が描かれているが，中景に葡萄摘みと背負い籠による収穫物の運搬，前景に葡萄踏みと樽詰め，出来たてのワインの試飲が描写されている。とりわけ，籠の底が狭くなっているのは，前かがみになって葡萄を大桶に入れるときに便利だからである。されに葡萄が落ちやすいように，籠の先端部分に板のあるフランス式の背負い籠は珍しい。

カレンダー頁には「10月」を擬人化して，以下のような詩が記されている。

わたしを思い出す者は
必ずや大いに喜んでくれるだろう。
10月と呼称されるわたしは
人びとに葡萄の若枝を摘ませると
それで国中の祭壇上に
秘蹟のワインが作られるから。
またわたしは実に美味しいワインを作り
わたしの酒蔵は褒め称えられるから[7]。

この詩の中で擬人化された「10月」が賞賛される理由として，前半では聖堂での祭壇上に捧げられる聖体としてのワインのため，後半は世俗人が賞味するワインのためという二重構造は，ルネサンス的で興味深い。

アントウェルペンで活躍したルーカス・ヴァン・ドゥーテクムの《9月》（図12）には，遠景に切り立った連山と裾野の葡萄畑が描かれ，中景に空に

なった籠を背負って畑に戻る農婦，樽を転がす男，そして作業場では桶から樽に葡萄汁を詰めている作業がある。余白の枠飾りには，上部にプットーたちが片手にワインのジョッキー，片手に杯をもったり，葡萄の木の蔓に登って葡萄の房を摘んだり，また桶の中の葡萄踏みをして遊んでいる。下の余白にはラテン語でこう書かれている。「9月は秋なり。太陽は天秤座にある。葡萄の収穫を得て，汝ら気に入るものを食せよ。」[8)]

フランスの版画家エティエンヌ・ドゥローヌは楕円形の構図で《10月》（図13, 1568年）の営みとしてのワイン作りをかなり詳細に描写している。中景右で女たちが葡萄摘みに専念し，屈強の男は葡萄を籠いっぱいに詰めて，背負い，大桶に入れ込む。別の男が葡萄を桶の中で踏むと，絞られた葡萄汁はバケツに流し込まれ，その後，中景左にある樽に注ぎ込まれる。しかし画家はこれらの作業を均等に描写したのではなく，一番，迫力のある葡萄運び，葡萄踏み，葡萄汁の採集を前景に位置づけている。

フランスの版画家モントルゴーイ通りの工房の画家は，《10月》（図15）で葡萄踏みに力点を置いている。右側の屋根つきの小屋には，醗酵中の葡萄でいっぱいになった大桶があり，1人の農民が出来たてのワインを試飲している。余白には，フランス語で真面目な労働と収穫に対する神への感謝の詩が記されている。

灼熱の太陽光線が
畑の葡萄を青く熟させると
とても美味なワインを得るために
丘陸や山地の葡萄が収穫される。
誰一人，どんな労力も惜しまず
葡萄を踏みしめる者，圧搾しようとする者
全ては至高の恩寵による神の施し物だ
ゆえに神のみを敬わなければならない

とても風味のあるワインを得るために[9]。

さらに同時代の画家ハンス・ボルは円形の構図で《10月》（図14）の営みを描いている。葡萄運びと葡萄踏み，その果汁の樽詰めなどが中心となっているが，そばで監督している老人は，おそらく葡萄畑の領主であろうか。彼の家は中景左にある立派な石造りの建物であろう。その近くの葡萄畑で1人の農夫が葡萄摘みをしているが，ブリューゲルの画面と同じく，茂っているはずの葉がかなり省略されている。

(3) 豚を肥らせる

《牛群の帰り》の中景を対角線に走る川の山側の農家に，1本のオークの木があり，農民が竿でドングリを落として，豚に食べさせている。この澱粉質の多い木の実は豚の好物である。しかし画面ではほとんど気がつかないくらいの点景として表現されている。

写本の世界

写本の世界では農民が豚群を森に連れて行き，ドングリの実を食べさせる情景が多い。『ベリー公の豪華時禱書』のジャン・コロンブ分担の《11月》（1416年以前，図16）では，農民たちが森の中の大きなオークの木の枝に向かい，棒を投げて，豚のためにドングリを落としている。『アデライード・ド・サヴォワ公妃の時禱書』（1450-70年）[10]の《11月》（図17）では，農民は防寒用の帽子や頭巾を被り，膝までのショースをはき，白，黒，グレーの豚群を連れて，村はずれに出かけていく。興味深いのは豚の1頭が前方を歩く雌豚に交尾をしようとすると，農夫が竿を振りかざし，やめさせようとしている点である。他方，すでに木の下では豚が落とされたドングリに群がっている。長竿をもつ若者は当世風のプールポワン（上着の一種）を着ている。農民たちは冬期の動物性たんぱく質である豚をこの時期に十分に肥らせ，12月になってから蓄殺，解体するのである（《雪中の狩人》を参照）。

月暦版画の世界

エティエンヌ・ドゥローヌの《11月》（図18）では，1本の大きなオークの木の下に豚の群れが集まり，ドングリを貪っている。側で1人の農夫が木の枝に向かって棒を投げようとしている。側で農婦が木株に寄り添って仮眠をとる。中景では羊の群れがのんびりと草を食べていると，羊番は同じく，安心したのか，居眠りをしている。余白の上下の枠飾りには餌箱に首を突っ込む豚が3匹づつ，左右に描かれている。下の余白にはラテン語の銘文が記されている。「11月は豚の腹をどんぐりで満たし，鳥と太った獣の肉とで豊かな食卓を与える。」[11]

ヒリス・モスタールトの《11月》（図19）では，前景で2人の樵が倒した木を切っている。村道では豚群を連れた農夫が歩いているが，手に竿を持っていることから，彼の目的もまた森で豚に餌を与えることであろう。そばには川がゆったりと流れ，ヨットも浮かび，のどかな秋の情景が描かれている。

ルーカス・ヴァン・ドゥーテクムの《11月》（図20）では，木の茂った深い森の情景がよく描かれている。農夫が妻とともに豚の親子の群れを森に連れて行くが，親豚は水を飲み，子豚は母親の乳を吸っている。他方，農夫は妻の持つ籠のパンを求めるという，のどかな情景がある。余白の枠飾りもかなり豪華で，下部の左右には豚が餌を探しているが，両側面では果実の連房と遊ぶプットーや花瓶から長く伸びる草花の図版がマニエリスム様式の手法で描かれている。下の余白にはラテン語でこう記されている。「11月，森の木を打ち，肝臓を分離せよ。水浴びと交尾を避けよ。」[12] 詩の内容は，オークやブナの木を棒で打ち，ドングリを落とし，豚を肥らせる。畜殺後，解体したら料理用に肝臓を取り出す。11月の豚の水浴びは寒すぎるので避けさせ，6週間の妊娠後，出産をする豚にとって12月の畜殺時に身ごもってない方がよい，という助言なのだろう。

(4) 鳥　罠

ブリューゲルの画面では牛追いたちのすぐ脇の平原のスロープに鳥罠が仕掛けられ，すでに数羽の小鳥が網の中でバタバタと暴れている。左のほうでは網のロープを力いっぱい引っ張っている農夫がみられる。ブリューゲルはこの作品以外に，同年に制作された《鳥罠のある冬景色》でも板の下に餌を置き，鳥をおびき寄せる罠を描いている。

写本の世界

グリマーニの聖務日課書の《10月》（図21）では，かなり大きなスペースで網による鳥罠がある。網の一方は地面に固定しているが，他方の網は作り物の馬に扮した農夫が持っている。こういう仕掛けは鳥を油断させるためであろう。しかし鳥のほうもなかなか用心深く，容易に罠にかからない。他に鳥籠方式の罠もあるが，中景には狩人による鷹を使った捕鳥が描かれている。スコットランドのジェームズ4世の画家の時禱書の《10月》（図22）では，小屋に隠れた農夫が鳥罠用のロープを持っている。ここでも鳥は網のそばまで行くが，中の餌には近づかない。だが鳥を安心させるために近くに4個の小鳥の家が置かれている。中景では犬をつれた狩人が槍を担ぎながら，獲物を追っていく。

2. 《雪中の狩人》（1565年，図23）

ブリューゲルは凍てつく真冬の厳しいフランドルの農村において，人びとがどのような生活をしているかをパノラミックに描いている。前景には数本の高い樹木の間を歩く猟師たちの帰還，中景には凍った池とその上で遊ぶ子供，村道には馬車で荷を運ぶ農民や聖堂とその周辺に立ち並ぶ農家があり，そして遠景には河口の沿岸の都会の景観がある。さらに右の遠方にはアルプスの山岳を思わせる，天を突くような切り立った山々が描写されている（図

24)。ブリューゲルがイタリアからの帰国後に制作した下絵素描に基づく版画《改悛のマグダラのマリア》(図25) には，この《雪中の狩人》に利用された切り立った山が描かれていた。とくに雪のない南斜面の描写まで，版画とこの油彩画は非常に類似している。前景で空高く飛ぶカササギはこの油彩画に重要なアクセントをなしている。こうした風景描写でとりわけ優れているのは前景の幾本もの樹木の枝にかかる残雪であろう。

四季の絵画での，冬には12月，1月，2月が含まれるので，それぞれの古い表記に注目してみよう[13)]。

12月　冬の月，クリスマスの月，

1月　新年の月，微温の月，冬の月，氷の月，雪の月，結婚の月。

2月　薪拾いの月，雪解けの月，クッキーの月，放蕩の月，喜びの月

以上の表記を見ると，この《雪中の狩人》では冬の月，雪の月，氷の月が表現されているが，後述の(5)で言及する薪拾いの月とかクッキーの月はむしろ《暗い日》に該当するのであろう。

では画面に登場する狩人，村人や子供たちの行動について詳しく述べてみよう。

(1) 帰路につく狩人

前景の3人の猟師は山での狩猟からの帰宅途中である。先頭から2番目の猟師は肩に長槍，腕には猟犬の首にしばった紐，腰にはナイフをぶら下げている。その後ろの猟師は腰に大きな狩猟袋，狩猟用ホルン，罠用のロープをつけている。しかしその日の猟師たちの獲物は狐一匹であった。猟師も13匹の犬も元気がないのは，獲物が少なかったからか，寒さで凍えそうなのか，おそらくその両方であろう。前景右端の水車の車輪がすっかり凍り，そこから長いツララが垂れていることからも，厳冬のフランドルの状況が想像される。風景描写でとりわけ優れているのは前景の樹木の枝にかかる残雪である。

(2) 豚の毛焼き（図 26）

居酒屋の前で，農民の男女による豚の毛焼きが行われている。居酒屋から農婦が運び出す藁は豚の毛焼き用，男が運びこんだ丸テーブルは豚の解体用である。ブリューゲルは以下に述べる写本のように，黒焦げになった豚の姿をリアルに表現していない。そのため，しばしば誤って暖をとるための薪の火と解されることもあった。近くにある桶は畜殺後に豚の血をためる容器であり，血はソーセージ用に加工されたが，今日でもベルギーではブーダンと呼ばれる民俗食である。男が丸テーブルを運んでいるが，毛焼きのあと，解体するためである。

ここで注目したいのは，《牛群の帰り》以外，季節画シリーズのどの作品にも，農婦が夫とともにあらゆる野良仕事に加っていることである。この豚の毛焼きでも箒を持った農婦が火加減を調節しているが，彼女たちの役割がより明白に描かれているのはブリューゲルの《ベツレヘムの人口調査》（図 27）の前景であろう。農夫が豚の喉元にナイフを当て，即死させると，豚の頚動脈から勢いよく放血するが，農婦はプライパンを差し出して，血を受ける。このように，農民の日常生活において，農婦の仕事は男女対等であることが分かる。この季節画シリーズでの農婦たちの立場に注目してみると，彼女たちは《暗い日》では山での薪拾い，《干草作り》では陽に干した草をレーキで集めたり，収穫された果実を頭に乗せて運んだり，《穀物の収穫》では刈り取られた麦を束ねるといった風に，夫とともに一日中，仕事を共にしている。

写本の世界

こうした農婦の仕事は以下に述べる聖務日課書や時禱書，また月暦版画においても描かれている。もちろん，農夫は干草や麦を刈るという，力のいる仕事，また生きている豚を畜殺するという危険は作業を担当する。しかしあるフランドルの時禱書のように（図 28），夫が薪割りをすれば，妻はそれを

集め，室内では若い母親が授乳し，別の農婦が牛の世話をするなど，女性たちは常に仕事に追われている。また夫が木に登って果実を落とせば，妻は地面に落ちたそれを拾い集めるなど（図 29），農民夫婦は全く対等に仕事をしている。しかも農婦は基本的には，育児，料理，糸紡ぎ，機織りといった日常の仕事からも手を抜くことができなかったのである。

炎の中で焼かれる豚は，ブリュッヘの無名写本画家によってすでに 1470–90 年頃，時禱書の《12 月》（図 30）に描かれていた。中庭での豚の毛焼きとテーブルの上での解体は異時同図的な描写といえよう。すでに鉈で切断された肢体は籠の中に入れられている。ほかにホルトゥルス・アニマエの画家の《12 月》（図 31）での作業はもっと大掛かりである。毛焼きをするのは 2 人の農夫であるが，ひとりの農婦は燃料の藁を運び，戸口に立ち，もう 1 人はブダーン用の血を入れる壷を手にしている。分厚い肉切り台には解体用のナイフが置かれ，準備万端である。

月歴版画の世界

この主題で最も古い版画のひとつは，前述したニコラ・ル・ルージュの『牧人暦』（1496 年，パリ発行）の《12 月》（図 32）であろう。写本とほぼ同じ図像であるが，仕事の順序としては中景から始まり，農夫がオークの木を竿で叩き，どんぐりを落として，豚に食べさせている。すでに小屋の内外に置かれた餌箱に首をつっこんで飼料を食べている豚もいる。続いて，前景には農民の夫婦の共同作業である豚の畜殺と血抜きが行われている。若い召使が豚の両後足を押えているのは，これまでにない描写だ。次の作業は豚の毛焼きであるが，中景の左側の家から，農婦が片手に火の点った松明，片手に燃料用の藁を持って出てくる。家の前には大きな毛焼き用の藁束がある。画面の建物の様子からは，ここは農村というよりは，都市の郊外のようである。また豚の畜殺という生々しい情景も，左右の装飾的な円柱の枠飾りによって，緩和されている。左のカレンダー頁には以下の詩が記されている。

わたしは高貴な 12 月
どの季節よりも賞賛されねばならない
私の月に王様中の王様が
聖母から誕生され
母の御身からお出ましになったから。
それは世界中の歓喜となった
イエスが私の月に生誕されたとき
栄誉があらゆるものを凌いだ[14]。

この詩は《10 月》と異なり，世俗的な要素は全くなく，幼子の生誕を称える内容に徹しているが，それは豚の畜殺といった図像とは全く異なったニュワンスである。おそらく，詩人は挿絵を見ることなく，作詞したと思われる。

金工細工師のために下絵を描いたエティエンヌ・ドローヌは楕円形の画面で 12 ヶ月を刻んだ。その中の版画《12 月》（図 33）では豚の毛焼き，畜殺，放血などが描写されているが，農夫は豚の喉を突いたときのナイフを口にくわえている。2 頭の豚の毛焼きが行われ，その火の炎はかなり激しく，煙もかなり高く上がっている。それを見た農民は驚いて手を広げている。他方，すでに解体された豚が前景の農家の外壁に掛けられている。

マルテン・デ・ヴォスはブリューゲルとイタリア旅行を同行したといわれる画家であるが，毛焼き，畜殺，解体を《11 月》（図 34）の営みとして描いている。前景で血を受けるためにフライパンを差し出す中腰の農婦は物腰も優雅で，イタリア・ルネサンス様式を思わせる。彼女の足元には豚の血を入れる 3 脚の鍋があるが，平坦でない地面に相応しい生活の知恵であろう。そばに藁束が置かれているが，毛焼き用の燃料である。版画では豚の喉元を刺すナイフがはっきり見られ，2 本目のナイフも農夫の腰に差されている。その後ろの家の中では，豚の両足を棒で縛り，豚を逆さまにぶら下げ，その下に血を受ける桶がある。デ・ヴォスの画面の周縁にはラテン語で「11 月，

私はあらゆる種類の引き裂かれた獣肉がある広い台所のきちんとした設備を見る」と記されている[15]。この光景は17世紀のレンブラントの油彩画《畜殺された肉》(1655年)を予見する。だがレンブラントは牛の内臓を地下室の光と影によってよりドラマティックに描いていた。

フランス・フローリス下絵に基づくL.ヴァン・ドゥーテクムの版画《12月》(図35)には，左半分に豚の畜殺，放血，2匹の豚の毛焼きがある。畜殺後の血抜きなのに，死んでいる豚が目を開けているのは不自然である。農夫がナイフを口にくわえている点など，ドローヌを霊感源としていることが分かる。地面にナイフが置かれているが，これは解体用であろう。画面の右半分ではパン種を丸める女たち，パン釜に薪をくべる男，解体した豚を大鍋で調理する姿がみられる。この版画の余白には黄道12宮の最後の摩羯座が描かれている。余白の銘文にはラテン語で「12月。冬，太陽は摩羯宮にある。汝はキャベツで食せよ。食物を用意せよ」と記されている[16]。

ポスト・ブリューゲルの油彩画の世界

アーベル・フリンメルは《秋》(図36)で，版画のモノクロの世界からは想像もできないほど，畜殺の行為を生々しく描いている。農夫は今まさに豚の喉元にナイフで突き刺し，放血させようとしている。前景の井戸の前に2人の男の子が立ち，その1人が吹いている風船は，豚の解体後に取り出された膀胱だったが，異時同図的な表現である[17]。

豚の畜殺の行事は同じく，17世紀のウィーン生まれの画家ステファン・ケスラーの《12月》(図37)でも詳細に描写されている。この月暦画シリーズは上部バイエンルンのベネディクトボイエルン修道院に所蔵されている。画面では豚の畜殺の一連の作業とともに，市民の家族がここを訪れ，農民に頼んで幼い息子のために豚の膀胱をもらうといったエピソードも前景に描かれている。さらにすでに料理が始まったり，居酒屋の料理人が右手の皿に豚の肉の塊，左手に大きなジョッキーを持って現れている。遠景には川岸を歩く，荷物運びのロバ，聖堂や家々が望まれる。このように，豚の畜殺の風景

が冬の行事として愛好されたかがわかる。

(3) 膀胱を待つ子供

ブリューゲルの《雪中の狩人》で，幼い子供がじっと毛焼きの火を見つめているが，この子供は豚の解体後，膀胱をもらうのを楽しみにしているのであろう。

フランスの時禱書で異時同図的に毛焼きをする父親と膀胱を膨らませる子供の姿が描かれている（1530年代，図38）が，豚の膀胱は風船や水泳のときの浮き袋として利用された。ブリューゲルの《子供の遊戯》〈1560年〉では，膀胱を風船にしたり（図39），それを2個，背負って川で水泳遊びをしたりする子供たちがいる（図40）。前述のルーカス・ヴァン・ドゥーテクム《12月》（図35）では，枠飾りに2人のプットー（裸の童子）が豚の背に腰を下ろし，膀胱を膨らませている。ブリューゲルの追従者アーベル・フリンメルの《秋》（図36）でも，こうした子供の姿がエピソードのひとつとなっている。

作業工程の記述の順序が前後したが，毛焼きの前に行われのが，豚の畜殺である。これは聖務日課書や時禱書での「11月」ないし「12月」でのもっともポピュラーな行事である。シモン・ベニングの『ダ・コスタの時禱書』の《12月》（1520年頃，図41）ではブリューゲルの《ベツレヘムの人口調査》を啓発したような，居酒屋の前で豚の畜殺が行われている。居酒屋の客たちが窓から首を出して，農民たちの仕事を見物している。居酒屋とその看板（星が描かれているので「星亭」と呼ばれていたのであろう），背景の小高い雪山とすっかり落葉し，枝だけになった樹木のシルエットなど，ブリューゲルの《雪中の狩人》の先例としての要素は十分にある。この写本での頭巾の上に帽子を重ねるという農婦の被り物は男性にも使われ，15世紀末のフランスの写本にもその作例がある（図42）。保温用と頭巾がずり落ちないための工夫と考えられる。この農夫は今や竿を使わずに，豚を様子をみながら，

寒そうに両手を組んでいる。

農夫が生きている豚の上に馬乗りになって押さえつけ，豚の喉をナイフで一突きして即死させるという，かなり写実的な表現がこれまでの作例でみられた。明治大学農学部の故友田仁教授によると，「豚が苦しむと肉の味が落ちるため，このような畜殺のやり方が一番，適切であろう」と筆者に語られたことがあった。

あるフランドルの16世紀前半の時禱書では，豚の畜殺が都会の道路で行われ，道路の反対側では解体したばかりの豚の頭部，腿，ソーセージなどが売られている情景がある（図44)。3人の同年齢の子供たちが豚の畜殺を見物しているが，その中には膀胱をもらう子供がきっといるはずだ。町並みはブリュッヘを思わせる。ところで豚の畜殺には別の方法もあり，1475年頃の写本などによると，農夫は矢尻りの柄で豚の脳天を叩こうとしている（図43)。そばで助手が豚の毛焼きをしているが，これも異時同図的な表現である。背景に垣根に囲まれた農家がある。1480年頃の写本では，ハンマーで打とうとする農夫に向かって，豚が牙をむいて襲いかかろうとしているが，こうしたリアルな情景も珍しい（図45)。一般にハンマーによる畜殺は，牛に対して行われるのである（図46)。ここでは室内で肉屋らしい人物が牛の両角を必死に押さえると，仲間が大ナタを振りかざし，柄で牛の脳天を叩こうとしている。家の外ではもう一頭の牛が待機させられている。これまでの作例で男たちは多く，白い前掛けをつけているが，家畜を畜殺するときの典型的な作業服である。

ホルトゥルス・アニマエの画家の《12月》（図47）では，粉雪の降る中に，農民夫婦による豚の畜殺，二人の農夫による解体に加え，左側の小屋ではパン作りに励む女たちの姿もみられる。また背景には池の中に立つ中世の宮殿があり，その屋根にはうっすらと雪が積もっている。さらに排泄物がすぐ下の池に落ちるように，外壁から張り出し式のトイレが設置されているが，これと同じ構造のものは現在もベルギーのボクレイクの野外美術館で保存され

ている（図48）[18]。この写本ページをコピーしたと思われる《12月》（図49）のミニアチュールがあり，両者を比較しても，あまりに類似しているため，後者の画家はホルトゥルス・アニマエの画家の工房にいたと推定される。なおこの時禱書では，12ヶ月の全部のミニアチュール上部の余白に，さまざまな子供の遊戯が描かれているユニークな写本である。聖務日課書や時禱書全体からみても，余白の彩飾に子供の遊戯が描かれている写本は非常に珍しい。この《12月》でも，子供たちが車輪つきの橇や馬の顎骨橇で滑るなど，冬らしい子供の遊びが展開している。

(4) 居酒屋の看板

ブリューゲルの前景左の居酒屋から，寒冷のため，金具が毀れたのであろうか，古看板が斜めに垂れ下がっている（図26）。看板には鹿の前にひざまずく聖人が描かれているが，それは聖フベルトゥスと思われる。ゆえに居酒屋は『鹿亭』と呼ばれたのであろう。貴族のフベルトゥスは復活祭前の聖金曜日，アルデンヌの森で狩猟の最中，1頭の白い鹿を見つけ，弓で射とめようとした。そのとき，鹿の角の間にキリストの磔刑像が輝いているのを見て，ひざまずいて，合掌した。この不思議な現象に心を打たれたフベルトゥスはキリスト教徒に改宗し，後に狩人の守護聖人となった。類似の伝説が聖エウスタキウスについても語られるが，彼はローマのトラヤヌス皇帝の近衛隊長であったのに対し，フベルトゥスはベルギーの東南リエージュの初代司教であり，その地で虐殺されているので，ブリューゲルは身近な聖フベルトゥスのエピソードを看板に描いたと思われる。なおベルギーでは11月3日が聖フベルトゥスの祝日であった。1923年にヘントで発行された『フランドルの民俗学カレンダー』によれば，ベルギーでも森の多い地域では狩人たちが聖フベルトゥスを篤く信仰し，11月3日には猟犬と一緒にミサに参列し，犬が賢くなるように聖人に祈ったという。そして猟での最初の獲物を聖人に捧げたのである[19]。

(5) 氷上での子供の遊び（図 50）

ブリューゲルの季節画シリーズの 5 点の中，4 点の作品に農民の激しい労働と平行に，目立たない場所ではあるが，“異時同図” 的に大人のリクレーションや子供の遊戯が描かれている。これは祈禱書や版画の月歴表現にはあまりみられない，ブリューゲル独特の人間観であろう。早春の《暗い日》では，薪集めや垣根作りに励む農民たちの側で，謝肉祭の帰りを思わせる農民の親子 3 人による楽しげな様子がある。若い父親はワッフルを食べ，ランプを持つ幼い子供は紙の王冠を被り，東方三博士の 1 人に扮している。前景の左では別の農民の家族が 3 人で踊っている。《干草作り》では干草の山を作り，出来上がった干草を馬車に積むなどの作業に忙しい農民たちに対し，遠景では弓術大会が行われている。《穀物の収穫》では炎天下での麦刈りという重労働が行われているが，中景では子供たちが杭に結んだガチョウを的にして棒で投げ当てるという，ゲームを楽しんでいる。だが《牛群の帰り》ではこうしたリクリエーションは描かれていない。

《雪中の狩人》には，氷の上でのさまざまな子供の遊びが描かれている。ブリューゲルの初期の《子供の遊戯》には，冬以外の 91 種類の子供の遊びが百科全書的に描かれているので，《雪中の狩人》からは冬の子供の楽しみを知ることができる。凍った池での独楽回し，カーリング，スケート滑り，ダンス，友だちと手をつないでの氷滑りなどであるが，とくに手前の子供は橇に見立てた 3 脚椅子にまたがり，それを友だちにロープで引っ張らせている。《雪中の東方三博士の礼拝》では，馬の頭蓋骨に跨り，それを橇代わりにして滑る幼い子供もいる（図 51）。ただしこのタイプの橇は小さな子供に限られるのである。また《ベツレヘムの人口調査》には子供たちによる活発な「雪合戦」があるが，これも 16 世紀前半のフランドルの時禱書に先例がある（図 52）。後者の《1 月》では，村の空き地で 4 人の子供が元気に雪合戦をしている。

抵抗力のない子供は寒さで風邪を引くだけでも，命を落しかねない。現代のように小児医療が発達している時代とは異なり，子供たちは冬の期間にこそ体を鍛えなければならない。そのため，思う存分，外で遊ぶことが大切と解されたのである。しかしブリューゲルはこの作品だけでなく，《鳥罠のある冬景色》（1565年）や《雪中の東方三博士の礼拝》〈1567年〉でも，氷滑りの出来る池には必ず，大きな穴を描いていた。つまり人生の落とし穴の危険を意図しているのである。いや氷滑りそのものが，人生を寓意しているのだ。ブリューゲルの版画《シント・ヨーリス門前の氷滑り》（図53）の17世紀の版には，オランダ語でこう記されているからだ。「こんな風にアントワープ市の前で人びとがスケート滑りをしている。ある者はこちらへ滑り，ある者はあちらへと滑り，彼らは四方から眺められている。よろめく者，転ぶ者，誇らしく正しい姿勢をとる者もいる。この図から学びなさい。我々がどのようにこの浮き世を渡り，それぞれ自分の道を滑るかを。ある者は愚かに，ある者は賢く，氷よりはるかに脆く，空しいこの世の上を」[20]。つまり人生にはいつも順調とはいかず，思いがけないときに災難が降りかかり，足を踏み外すことがあるという教訓なのである。

ポスト・ブリューゲルの油彩画の世界

フリンメルの《冬》（図54）では，この季節のリクリエーションが主な題材となっている。「12月」と「1月」には氷上のスケートや橇滑りが描かれ，貴族から市民や農民，子どもまで夢中になって冬のスポーツを楽しんでいる。中央に領主の水上宮殿，左に大きな居酒屋風の建物という風に，建築でも貴族と庶民の対比を示している。このような湖水の中に建てられた夏の宮殿は，今日のベルギーで数多く保存されている（図55）。画面では，《シント・ヨーリス門前の氷滑り》に影響を受けてか，氷の上を順調に滑る者，ひっくりかえる者，氷が割れて溺れかけている者など，さまざまの姿が描かれているが，これにも「人生」の比喩が意図されているのであろう[21]。

(6) 凍てつく冬の大自然を謳う

この《雪中の狩人》を見ると，16世紀のフランドルの冬が如何に厳しい季節であったかが想像される。ブリューゲルはほぼ同年の《鳥罠のある冬景色》や2年後に制作した《雪中の東方三博士の礼拝》でもそうした状況を表現していた。16世紀スコットランドの詩人ガヴィン・ダグラスが古代ローマのウェルギリウスの長編詩『アエネーイス』第7巻にプロローグとして自作の詩を添えているが，まさにブリューゲルの画面を想起させる。

1年がめぐって凍てつく時を迎える地域では
厳しく，冷たく，青ざめた季節となる
学僧たちが冬と呼ぶ日脚の短い日々
北方の心である荒れた突風が
海洋の神ネプチューンの馬車を転覆させ
木々の葉をすべて震わせる
怒り狂った嵐が壁のような海を打ち砕く
……
大地は色褪せ，畑はいたるところ朽葉色となり
山の頂上の岩は雪で覆われる
硬い荒削りの玄武岩のぎざぎざした岩山では
冷たい鉤爪のような石が氷結した表（おもて）を見せ，光る。
美は失われ，土地は不毛と化す
野原の作物は凍った空気で押しつぶされる

純朴な労働者や忙しい農夫たちは
ずぶぬれになり，疲れ果て，沼地に体を引きずってゆく
従順な羊やその小さな牧童たちは

土手，森，潅木の下に身を潜め
ロバ，馬，牡牛，牝牛のような
大きな動物たちは
家畜小屋の中でじっとしている。

餌付けされた，牙のあるイノシシや小屋の中の肥った豚は
さまざまな仕方で保護される。
収穫時や夏の備えのために[22]。

さらに18世紀になると，スイスの詩人アルブレヒト・フォン・ハラーは長編詩《アルプス》（1729年）の中で，厳冬期での山岳地方の人びとの暮らしを以下のように謳っている。《雪中の狩人》よりも約150年以後に書かれた詩ではあるが，アルプスの氷山のふもとで，厳しい寒さの日々の中でも平穏に暮らす村人の生活をこれ以上に語る言葉はないであろう。以下の詩行はブリューゲルがかつてアルプス越えをしたときに感動した風景と重なる。

汝ら，自然の民よ，汝らはまだ黄金時代を知っている！
だがそれは詩人たちのすばらしき華麗な国ではない
……
運命は汝らにテンペ谷の温かさを与えはしなかった
汝らが吸い込む雲は雪と氷でいっぱいだ
冬は長く春の来るのは遅い
そして永遠の氷が冷たい谷を取り囲む
けれど彼らの生活の素朴さがすべてをよきものとし
自然の厳しさが汝らの幸せを大きくしたのである（遠山義孝訳）[23]

以上，5点現存のブリューゲルの季節画シリーズの中，本論稿では《牛群

の帰り》と《雪中の狩人》について論じた。とりわけ，これらの作品に対し，さまざまなフランドルの祈禱書が重要な先行例となっていることを指摘した。またブリューゲルのこれらの2作品と同時代の月暦版画との図像的な比較も行った。それによってブリューゲルが従来の月暦図像の伝統に隷属することなく，新しい季節表現を確立したことを例証した。例えば，ブリューゲルが《牛群の帰り》で鳥罠や葡萄の収穫を目立たない添景としながら，牛追いの牧人たちを秋にもっとも相応しい光景に選んでいた。また《雪中の狩人》では，ブリューゲルが豚の畜殺という一連の作業の中で，豚の毛焼きのみを抽出し，むしろ山から帰還する狩人たちの後ろ姿を前景にクローズアップすることで，中景から遠景に展開する冬の広大な風景と調和させた。こうした新しい図像表現によってブリューゲルの季節表現の独創性が一層，きわだってくるのである。

《注》

1) 森洋子「ブリューゲルの二素描《春》《夏》にみられるフランドルの時禱書と月暦版画の図像的伝統について」『明治大学教養論集』1985年3月，184号，pp. 361-473.

2) オランダ語の月（maand, maend）の古い呼称は以下の文献を参考にした。
Reinsberg-Düringsfeld, *Calendrier Belge,* Bruxelles 1860, 2 vols; Gab. Celis, *Volkskundige Kalender voor het Vlaamsche Land,* Stichting Mens en Kultuur, 1990.

9月	Herfstmaend, Fruitmaend, Havermaend, Gerstmaend, Speltmaend, Pietmaend, Evenmaend
10月	Sint Baafsmaend, Zaaimaend, Eikelmaend, Aerzelmaend, Reuzelmaend, Wynmaend Rozelmaend
11月	Allerheiligenmaend, Slachtmaend, Offermaend, Bloedmaend, Smeermaend, Windmaend, Hoermaend

3) Hans Sedlmayr, "Die 'Macchia' Bruegels", *Epochen und Werke,* Bd. I, 1959, pp. 309-310.

4) Arthur Haberlandt, "Beiträge zur Volkskunde Tirols", *Festschrift für H. Wopfner,* II, Innsbruck 1948, pp. 89-100.

5) Reinsberg-Düringsfeld, *op. cit.,* vol. 2, pp. 216-217.

6）森洋子「ブリューゲル再考 ── 歴史的，文化的土壌に立って ──」『ブリューゲルの世界』展覧会カタログ，1995年，朝日新聞社，pp. 32-33.

7）Nicolas le Rouge, *Le grant kalendrier et compost des Bergiers avecq leur Astrologie,* "Octobre", Troyes, rpt, Paris 1976, n. p.

8）"September/Autumnus, Sol in Libra, Vindemia, vescere quibuslibet." 本稿で引用したいつくかの版画のラテン語の銘文について，敬和学園大学金山愛子助教授からご教示を得た。

9）版画の下には以下のフランス語の詩が記されていた。

"Quand les rayons du Soleil chaleureux
Ont azuré les Raisins des Campaignes,
Pour en tirer le vin tres-sauoureux,
Vendengéz sont, & costaux, & montaignes:
A qui mieux mieux, nul n'espargne les peines,
L'vn foule en cuue, l'autre va pressurer:
Tout vient de Dieu, par graces souueraines,
C'est pourquoy seul le deuons reuerer."

なお翻訳にあたり，フランス文学者大場恒明氏のご教示を得た。

10）J. Bouissounouse, *Jeux et Travaux,* Paris 1925.

11）"Glandibus infercit porcos, mensasq Nouember/Opiparas reddit, avibus, pinquis ferinas."

12）"November/Sijluas caede, Hepaticam seca, Balnea, coitus que fuge."

13）12月　Wintermaend, Kerstmismaend, Kristusmaend, Joelmaend
　　1月　Nieuwjaarsmaend, Lauwemaend, Wintermaend, Ijsmaend, Huwelijksmaend, Sneeuwmaend, Hardmaend
　　2月　Sprokelmaend, Dooikortemaend, Koekenmaend, Blydemaend, Lichtmismaend

14）Nicolas le Rouge, *op. cit.,* "Decembre", n. p.

15）"Nouember Prospicio vacvae pulchra ornamenta cvlinae omnigena pecvdvm laniata carne."

16）"December/Hyems, Sol in Capricorno, Caulibus vescere Instrue Culinam."

17）森洋子監修『黄金期フランドル絵画の巨匠たち展』展覧会カタログ，2001年，読売新聞社，「アーベル・フリンメル」の解説，pp. 121-122.

18）Bokrijk, Openluchtmuseum (Provincial open-Air Museum), Limburg 地区の9番。

19）Celis, op. cit., p. 293.

20）『ピーテル・ブリューゲル全版画展』東京新聞，1989年，p. 157の邦訳を参考にした。

21）森洋子（2001）前掲書，p. 122.

22）Gavin Douglas について：Derek Pearsall, Elizabeth Salter, *Landscapes and Seasons of the Medieval World,* London 1973, pp. 237–239. 邦訳に関し，同志社大学名誉教授斎藤勇博士のご教示を得た。

23）アルブレヒト・フォン・ハラー《アルプス》（1729 年），遠山義孝訳，『文学空間』2004 年，vol. V, p. 107.

＊以上，本論稿で掲載した図版資料は筆者が長年，欧米の図書館，美術館，美術史研究所で収集したものであるが，写本関係については，一部 Wilhelm Hansen, *Kalenderminiaturen der Stundenbücher,* München 1984 から転載した。

（もり・ようこ　理工学部教授）

図1　ピーテル・ブリューゲル《牛群の帰り》1565年　油彩　ウィーン　美術史美術館

図2　ブリューゲル「廃墟化した中世の城砦」（図1の部分）

図3　ブリューゲル「葡萄の収穫」（図1の部分）

図4　マルテン・ヴァン・ヴァルケンボルフ《放蕩息子のある風景》16世紀末　油彩　ウィーン　美術史美術館

図5　ブリューゲル「処刑場の光景」
（図1の部分）

図6　ピーテル・ブリューゲル「岩山」
（《干草作り》の部分）1565年頃
油彩　チェコ　個人蔵

図7　ヘラルト・ホーレンバウト親子《9月》（『グリマーニの聖務日課書』より）
1510–20年頃　Venezia, Biblioteca Marciana, Breviarium Grimani, fol. 9v.

図8　シモン・ベニング《10月》（『ゴルフの書』より）1540年頃　London, British Library. add. ms. 24098, fol. 27 v.

図9　シモン・ベニング《10月》（『時禱書』より）1540年頃　München, Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 23638, fol. 11 v.

図10　《葡萄の収穫とワイン圧搾》16世紀初期　タピストリー　南ネーデルラント　パリ　クリュニー美術館

図 11　《10 月》（『牧人暦』ニコラ・ル・ルージュ発行より）1496 年　木版画

図12　ルーカス・ヴァン・ドゥーテクムの《9月》16世紀後半　銅版画

図13　エティエンヌ・ドゥローヌ《10月》1568年　銅版画

図14　ハンス・ボル《10月》16世紀後半　銅版画

図15　モントルゴーイ通りの工房の画家《9月》1580年頃　銅版画

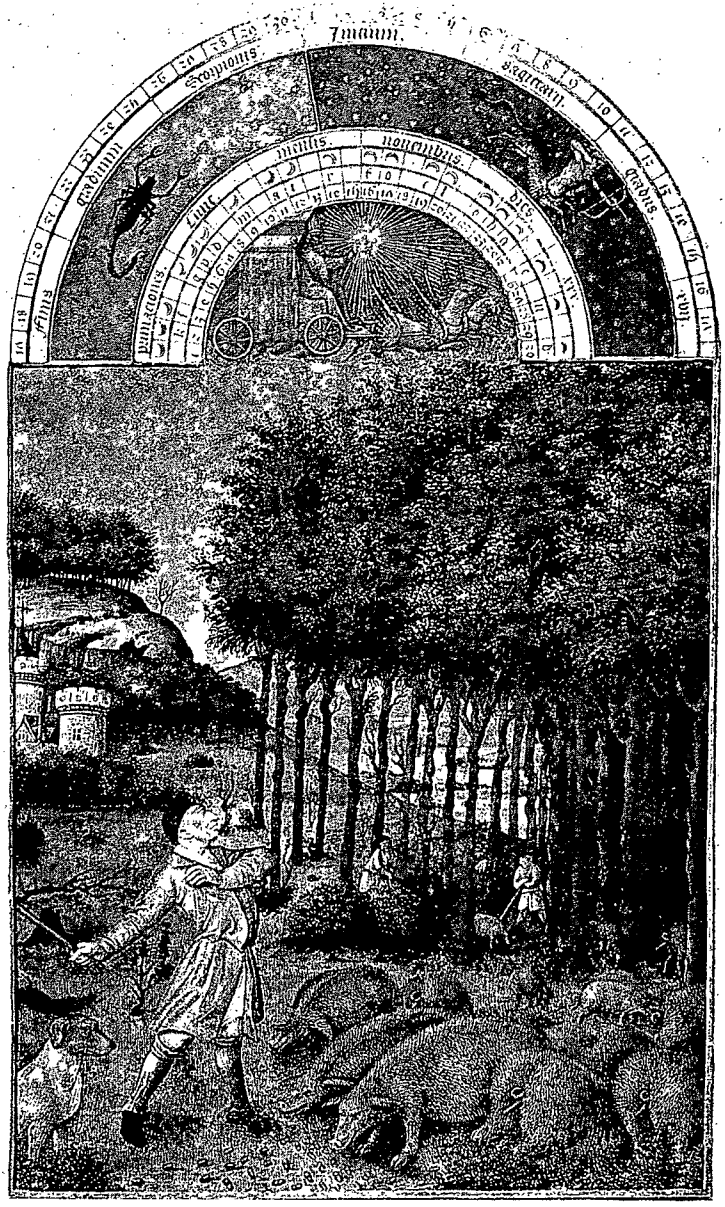

図16　ジャン・コロンブ《11月》（『ベリー公の豪華時禱書』より）
1416年以前　Chantilly, Musée Condé, ms. lat. 1284, fol. 11 v.

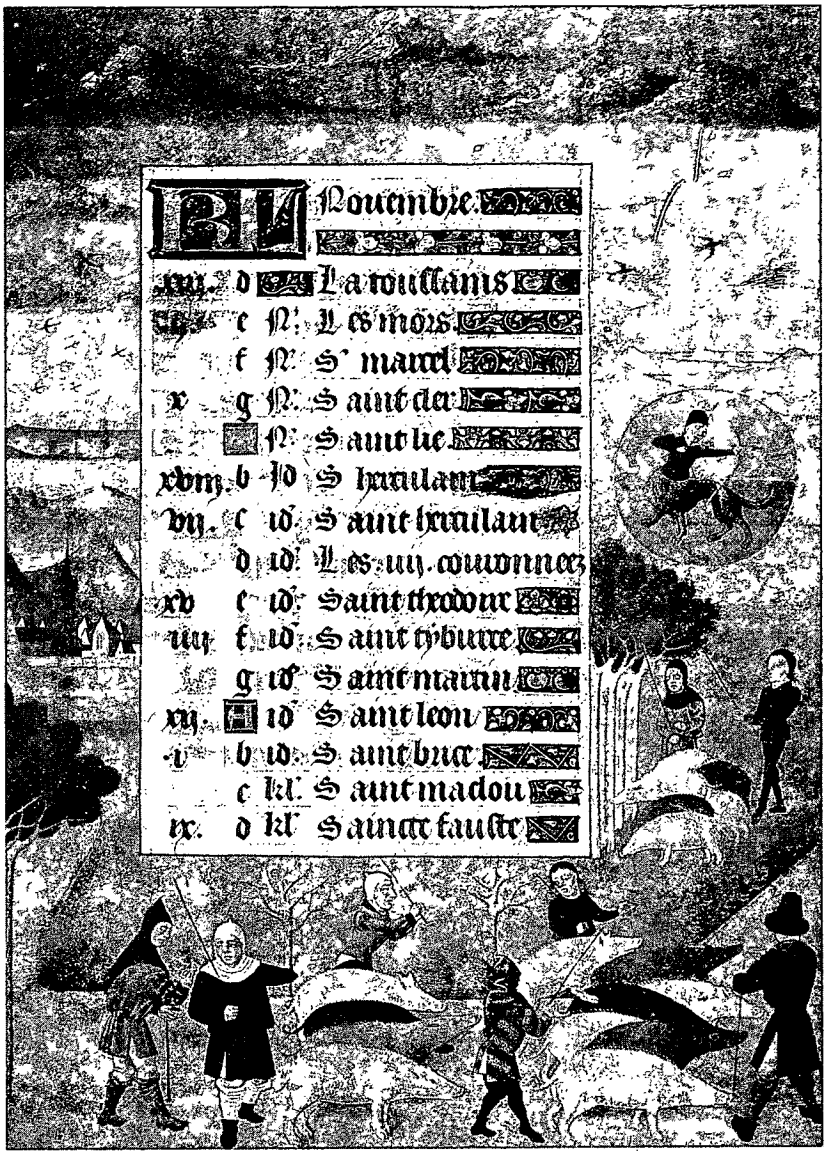

図 17　《11 月》（『アデライード・ド・サヴォワ公妃の時禱書』より）1450–70 年頃
Chantilly, Musée Condé, ms. lat. 1362, fol. 10 v.

図18　エティエンヌ・ドゥローヌ《11月》1568年　銅版画

図19　ヒリス・モスタールトの《11月》16世紀後半　銅版画

図20　ルーカス・ヴァン・ドゥーテクムの《11月》16世紀後半　銅版画

図21　ヘラルト・ホーレンバウト親子《10月》（『グリマーニの聖務日課書』より）
1510–20年頃　Venezia, Biblioteca Marciana, Breviarium Grimani, fol. 11r.

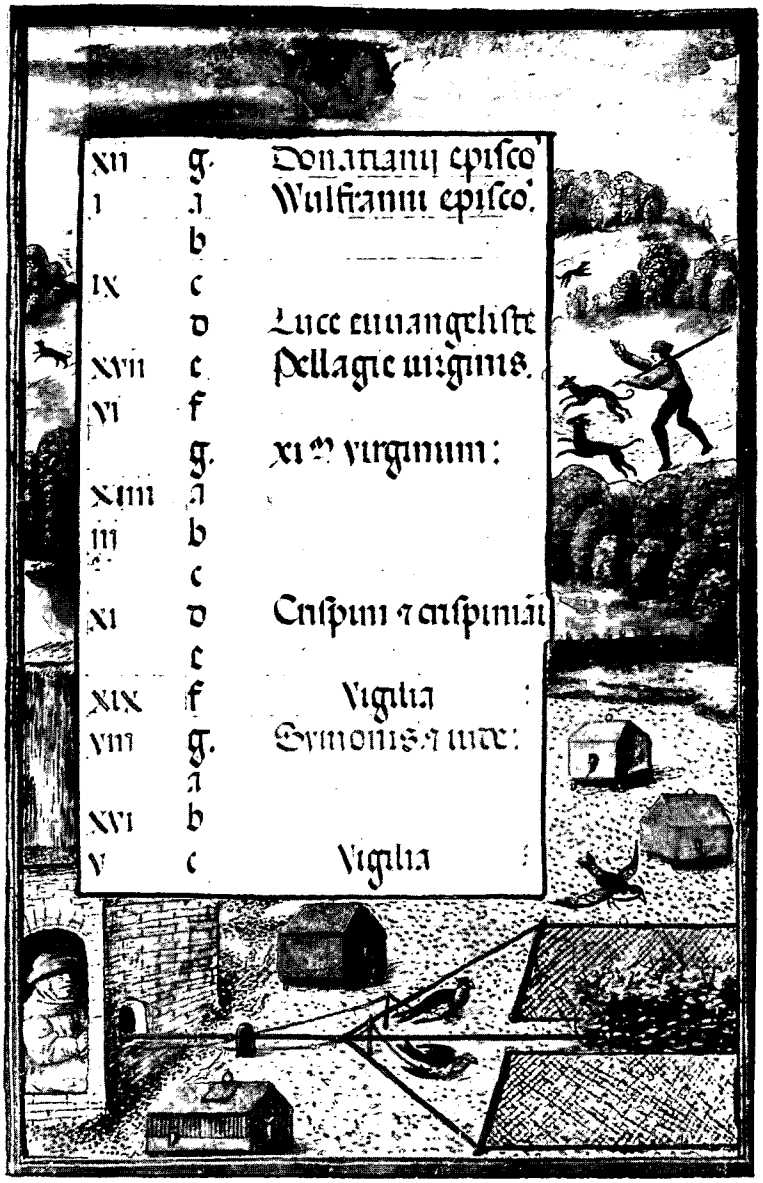

図 22　スコットランドのジェームズ 4 世の画家《10 月》（『時禱書』より）
16 世紀初期　Wien, Österreichische Nationalbibliothek,
cod. 1858 fol. 11 r.

図 23　ピーテル・ブリューゲル《雪中の狩人》油彩　1565 年　ウィーン　美術史美術館

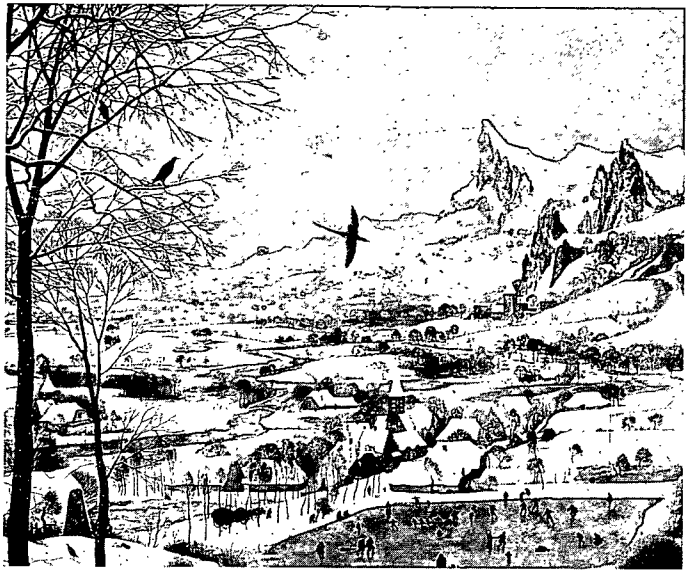

図24　ブリューゲル［雪に覆われた鋭峰］（図23の部分）

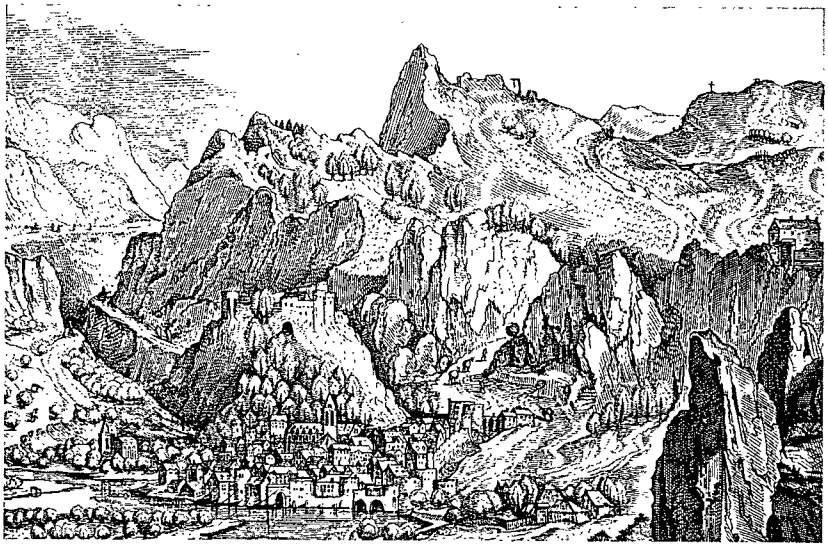

図25　ピーテル・ブリューゲル《改悛のマグダラのマリア》版画　1555年頃

図 26　ブリューゲル「豚の毛焼き」
（図 23 の部分）

図 27　ピーテル・ブリューゲル
《ベツレヘムの人口調査》（部分）
1566 年　油彩　ブリュッセル
王立美術館

図 28　シモン・ベニング《1 月》（『時禱書』より）1540 年頃　München, Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 23638. fol. 2 v.

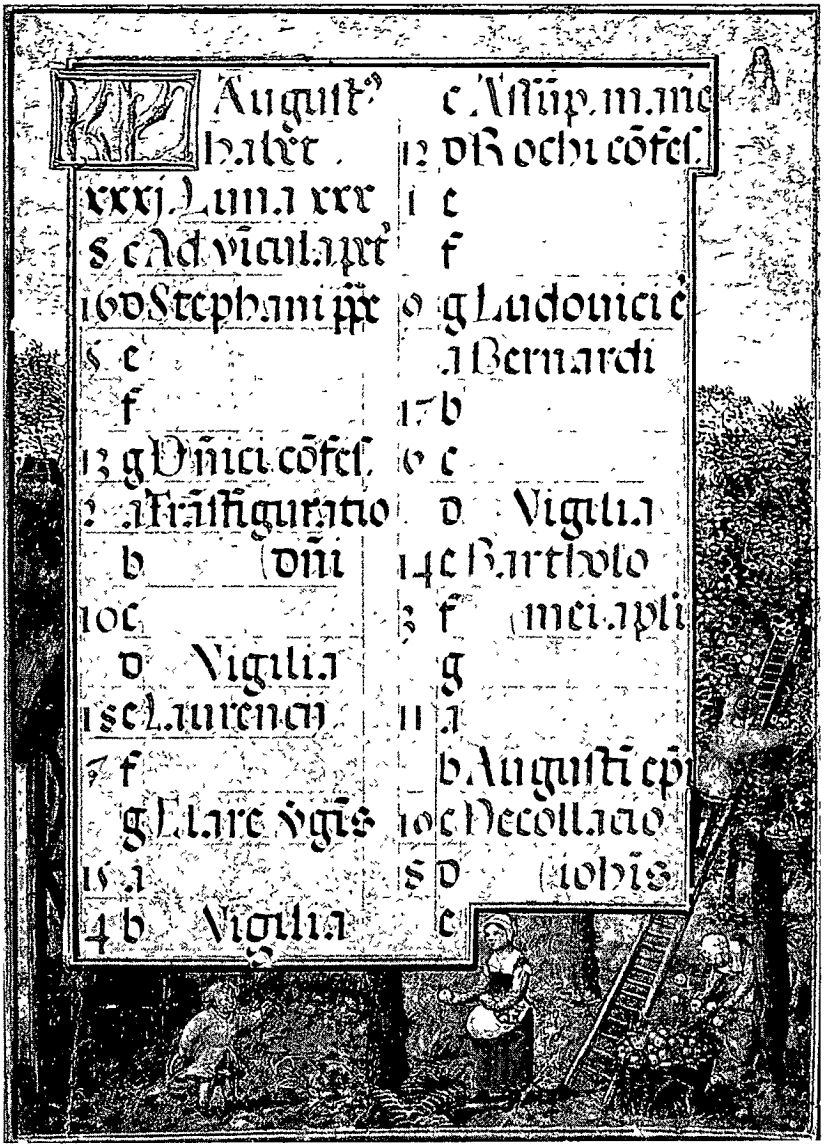

図 29　シモン・ベニング《8 月》（『時禱書』より）1540 年頃　Munchen, Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 23638. fol. 10 r.

図 30 《12 月》（『ドレスデンの時禱書』より）
1470–90 年頃　Dresden,
Sächsische Landesbibliothek, A 311, fol. 12 v.

図 31　ホルトゥルス・アニマエの画家《12 月》1500 年頃　München,
Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 28345. fol. 13r.

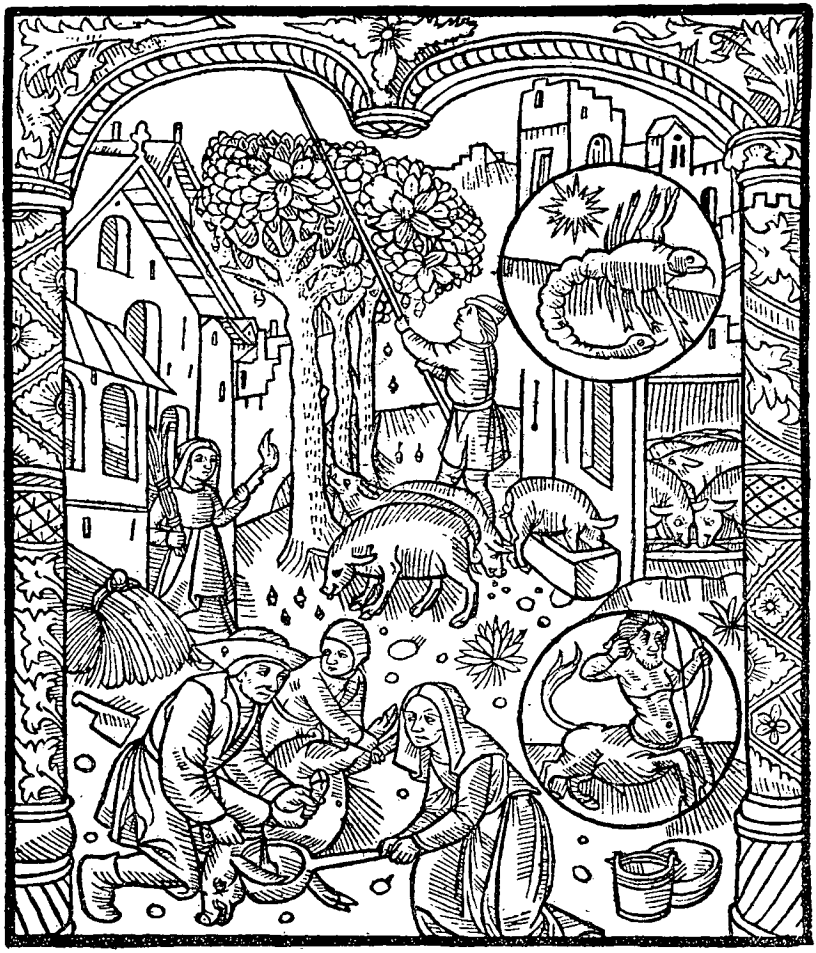

図 32 《12 月》(『牧人暦』ニコラ・ル・ルージュ発行より) 1496 年　木版画

図 33　エティエンヌ・ドローヌ《12 月》1568 年　銅版画

図 34　マルテン・デ・ヴォス《11 月》16 世紀後半　銅版画

図 35　フランス・フローリス下絵《12 月》16 世紀後半　L. ヴァン・ドゥーテクム彫版　銅版画

図36　アーベル・フリンメル《秋》17世紀初期　油彩　アントウェルペン　王立美術館

図 37　ステファン・ケスラー《12 月》1675–80 年頃　油彩　バイエルン州　ベネディクトボイエルン修道院

図38　《11月》（『時禱書』より）1530年代　Paris, Bibliothèque Nationale, ms. fr. 1872, fol. 13 v.

図39　ピーテル・ブリューゲル「膀胱（風船）を膨らませる」（《子供の遊戯》の部分）1560年　油彩　ウィーン美術史美術館

図40　ピーテル・ブリューゲル「膀胱（浮き袋）」（《子供の遊戯》の部分）1560年　油彩　ウィーン　美術史美術館

図41　シモン・ベニング《12月》（『ダ・コスタの時禱書』より）1520年頃
New York, Pierpont Morgan library m. 399

図 42 《11 月》（『時禱書』より）15 世紀末　Paris, Bibliothèque Nationale, ms. lat. 886, fol. 9 r.

図 43 《12 月》（『時禱書』より）1475 年頃　Österreichische Nationalbibliothek, cod. 1944, fol. 12 r.

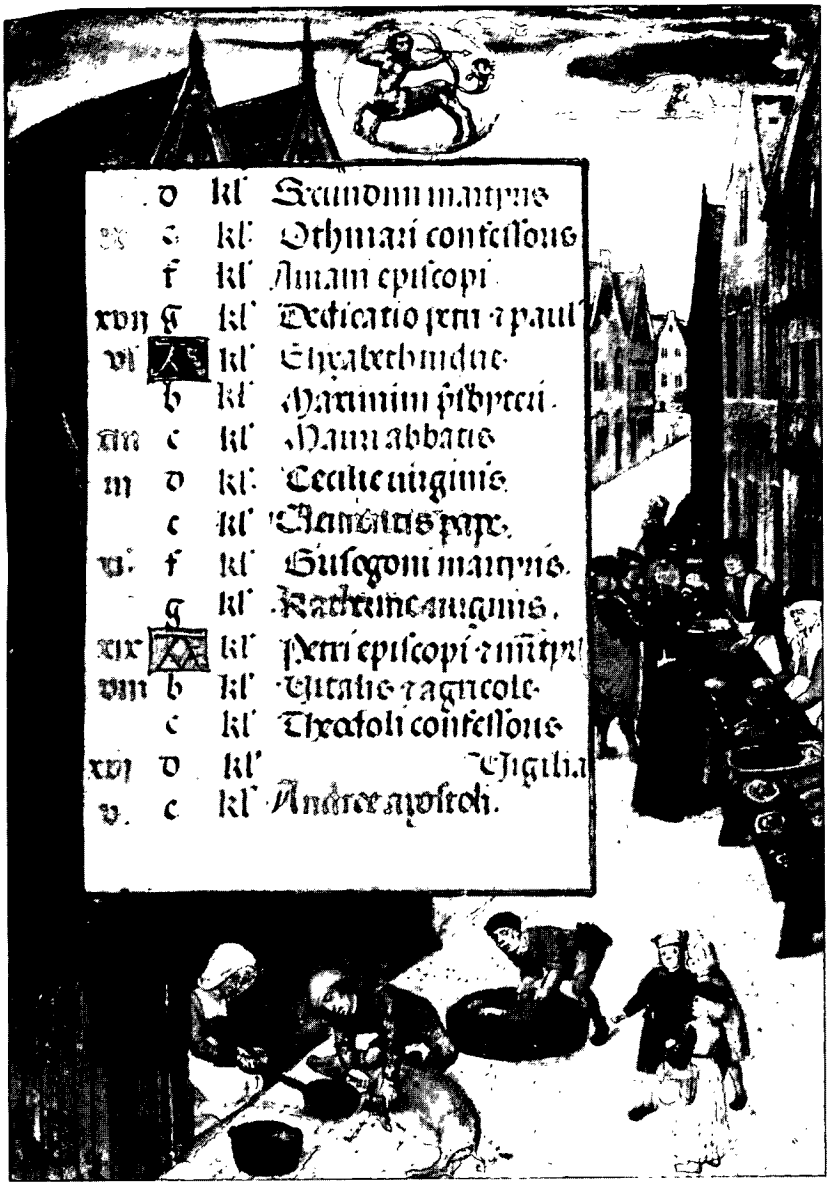

図 44　《12 月》（『時禱書』より）16 世紀前半　Sibiu Hermannstadt, Museum Brukenthal, Inv. N. 1. fol. 23.

図45　《12月》（『時禱書』より）1480年頃　Österreichische Nationalbibliothek, cod. 13239, fol. 13v.

図46　《11月》16世紀前半　München, Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 23637, fol. 5v.

図 47　ホルトゥルス・アニマエの画家《12 月》
（『時禱書』より）1510–20 年頃
Österreichische Nationalbibliothek,
cod. 2706, fol. 18 r.

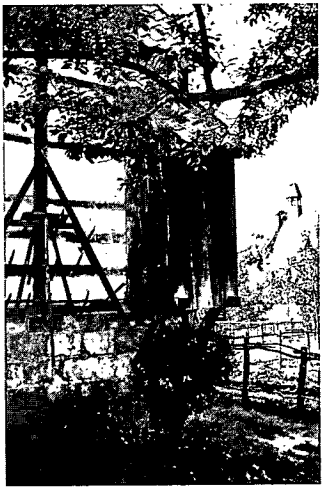

図 48　張り出しトイレ　18, 19 世紀
リンブルク地方,
ボークレイク（ベルギー）
野外美術館

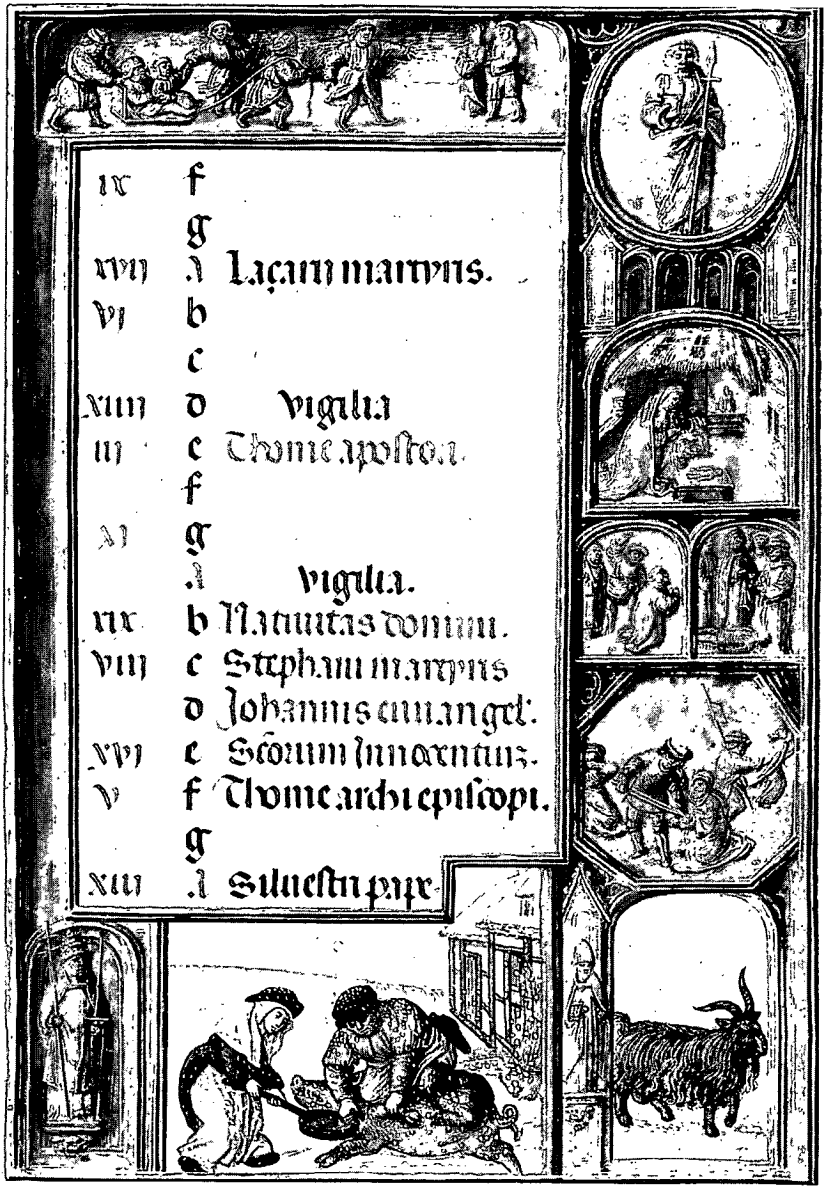

図 49　ホルトゥルス・アニマエの画家の工房《12 月》（『時禱書』より）1510-20 年頃
München, Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 28346, fol. 16r.

図 50　ブリューゲル「氷上での子供の遊び」（図 23 の部分）

図 51　ブリューゲル「馬の頭蓋骨に乗って氷滑りをする子供」
（《雪中の東方三博士の礼拝》の部分，油彩，1567 年）

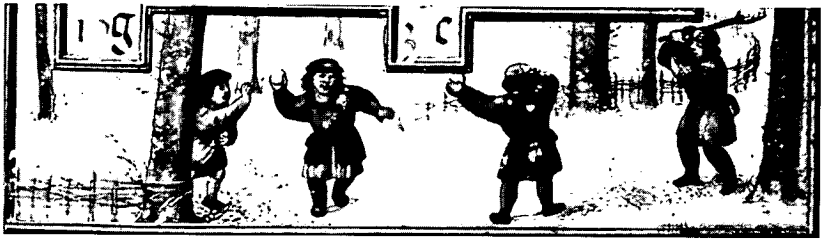

図 52　「雪合戦をする子供」（『時禱書』より）16 世紀前半　München, Bayerische Staatsbibliothek, cod. lat. 23638. fol. 3r.

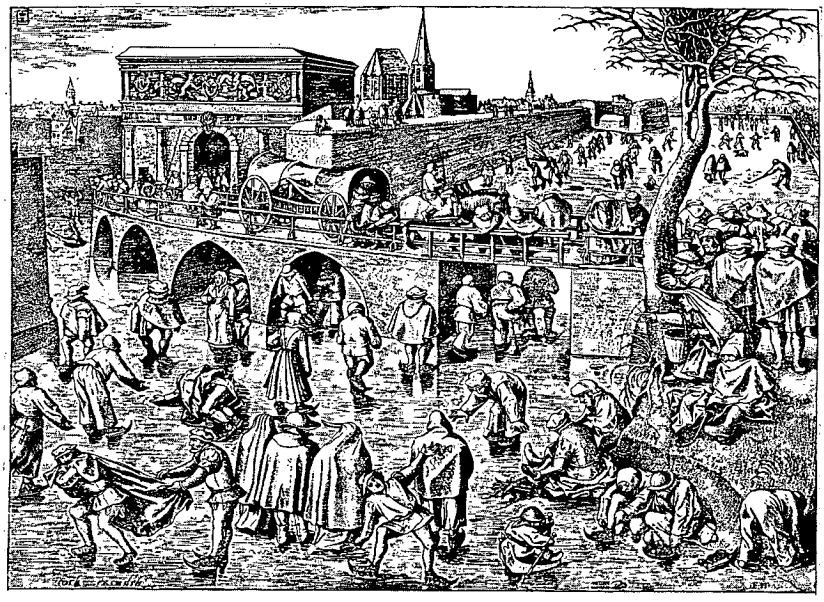

図 53　ピーテル・ブリューゲル《シント・ヨーリス門前の氷滑り》（下絵素描 1559）銅版画

図54　アーベル・フリンメル《冬》17世紀初期　油彩　アントウェルペン　王立美術館

図55　水上に立つ宮殿　ラメイエン（ルーベンスの息子ニコラス旧蔵）
写真　Georges-Henri Dumont, Damien Hubaut,
Paul Verckx Paul Mercks, *Chateaux en Belgique,*
Bruxelles 1992, p. 188